

先見経済 SENKEN KEIZAI

Since 1938

Jul. 2011

7 15

7月15日号

特集

社員を守れ!

職場のメンタルヘルスマネジメントを考える

好評連載

井熊 均
井徳 正吾
今井 激
鎌田 慧
境野 勝悟
高橋 陽子
沼崎 益夫
松野 豊
村田 裕之
和田 努

先見人

月島食品工業株式会社
代表取締役社長
戸田 信之

先見TOP interview

豊かな日本を 育てる実のある 投資を(後編)

コモンズ投信株式会社
取締役会長

渋澤 健

聞き手・山口哲史

清話会セミナー講演録

一色正春

sengoku38が明かすビデオ公開への思い

一坂太郎

世界から賞賛された日本人の美しさ

播磨かおり

今、自社に必要な福利厚生プランとは

豊かな日本を育てる実のある投資を(後編)

現代の企業経営に通じる渋沢栄一の金言

聞き手▼山口哲史 株式会社フロ・アクティブ代表

6月15日号に引き続き登場するのは、コモンズ投信株式会社会長の渋澤健氏。初めての起業をきっかけに高祖父・渋沢栄一の研究を開始するようになる。世界における日本の役割、日本人が歩むべき道を聞いた。

(6月15日号からの続き)

渋澤 日本の財団法人で2年間働き、アメリカのビジネススクールに戻ったのが、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われた時代。当時、MBAを持った日本人はウォール街で大歓迎されました。ここでノン・プロフィット(非営利)の世界からエクストリーム・プロフィット(超営利)の世界へと舵を切ったわけです。その後ヘッジファンドにも勤めました。

山口 一気に世界金融市場の第一線に飛び出していったわけですが、日米で働いてみて何か「気づき」はありましたか。

渋澤 アメリカでは大富豪が、富を社会へ直接的に還元することが自然なライフスタイルとして組み込まれていました。それ

が日本にはなかった。つまり、米国では、営利事業と社会事業は異なる分野ではなく、直接的につながっているのです。

山口 日本では、税金を納めることだけが社会貢献と考えている人が多いように感じます。

渋澤 納税は社会参加の最低限の義務なので否定する気はありません。しかし、例えば私が山口さんを応援したときに、納めた税金がその目的のために使われるとは限りません。そこで2001年の起業時に、日本から顧客開拓を考える米ヘッジファンド会社に、「日本で社会事業を立ち上げようとしている社会起業家を応援する仕組みをつくりたい」と提案、快諾してもらいました。03年から運用を開始したファンドは、リーマン・



先見TOP interview

with コモンズ投信株式会社 取締役会長

健 澤 史

ホスト

株式会社プロ・アクティブ代表

山口哲史 (くやまぐち・てつし)

1961年兵庫県生まれ。関西学院大学商学部卒業後、リクルートなどを経て90年、現(株)プロ・アクティブの前身のフィールド・アクティブを設立。竹100%でできた繊維など自然でピュアなエネルギーを活用した「人を自然に輝かせる(ラディアンス)力」のある健康、美容商品の企画・販売を手掛ける。社内外ともに「ガッツさん」の愛称で親しまれている。

<http://www.pro-active.co.jp>

ショックの起こる08年まで順調に規模を拡大していきました。
山口 澤澤さんの1つの思いから始まっているところに、民間でやる意味を感じますね。

2人の「上」との出会い 生命論的な運用会社を

澤澤 同じころに、独立系投資信託会社のさわかみ投信の澤上篤人さんや、「モノ言う株主」と村上ファンドの村上世彰さんという2人の「上」との出会いはありました。

山口 個性的な2人ですね。

澤澤 2人の投資の方針はまったく違いました。澤上さんとはパネルディスプレイで、そこで一緒にする機会があり、そこで教えてもらったのは、「投資信託でベンチャーを設立できる」ことでした。長期投資という自分の

夢を訴えて、この指止まれ方式で、その思いに共感した一般個人たちからお金を一手に集めて運用する。共感できない人は来なくていいと追っ払ってしま

う。一方、村上さんは、強い日本をつくるためには個々の企業の価値を見いだし、ガバナンスを強化してより強くなつてもらおうというやり方でした。この2人の視点、個人から募る長期資金と個々の企業の集中投資を取り入れ、双方の「対話」を促す、面白いファンドをつくりたいと考えたんです。

山口 村上ファンドは「ハゲタカ・ファンド」と揶揄され、企業から恐れられる存在でしたが。

澤澤 私は経済同友会にいたときに、経営者もプレッシャーを感じていることを知りました。

た。資本市場はすぐに結果を求め、会社が一番苦しいときに入ってきて、ちよつと良くなると逃げてしまうので、ファンドを「ハゲタカ」と毛嫌いな経営者が少なくありません。村上さんは株主の権利を主張し、「こ

うやるべし」と言いましたが、経営者は疲れてしまふ。そこで必要となるのが「対話」。

山口 こうして話を聞くと、現在の澤澤さんが練り上がってきた経緯が分かりますね。

澤澤 その後、08年にはコモンズ投信を創業し、個人向けのコモンズ30ファンドも始めました。この対象顧客は一般個人です。例えば毎月3000円しか積み立てられない学生も、将来破綻しているかもしれない年金の代わりになれば、という考えを元につくつたものです。今後

要となるのが「対話」。田坂広志さんの言う、合理性だけでは説明し切れない曖昧な部分も内包する「生命論」的な運用会社をつくらうと考えたわけですね。

社会貢献につながる事業を 民間で立ち上げる意味

すが、澤澤さんのなかで、澤澤一と現業とをリンクさせたのはいつごろからですか。

澤澤 起業時に何か指針となるものはないかと考えたのが、澤澤一研究のきっかけです。それまでは、「日本初の銀行をつくつた人」などの史実以外、どんな思いで行動してきたかは、ほとんど知りませんでした。

山口 子どものころ、親から逸話を聞かされたということもなかったのですか。

澤澤 なかったですね。ただ全68巻の伝記資料がありました。澤澤一は財を遺しはしませんでした。澤澤一は財を遺しはしませんでした。澤澤一は財を遺しはしませんでした。

もこのような、時代を超えるサービスや新しいライフスタイルを提供していきたいですね。

山口 コモンズに30年預けるのと、郵便局に預けるのでは意志も意味合いも違いますね。

財は遺さずとも 言葉を残した澤澤一

山口 澤澤一翁の話に戻りま

ん遺してくれました。これには大変感謝しています。私もブログ、メルマガ「ジブサワレター」、コラムなどの執筆活動をしています。これらを書かなければ、どれだけの時間が経ていっても、言葉が面白いのは時代を超えるから。バカをするとは財はなくなりませんが、言葉はなくなりません。